

小学校から中学校へとつながる 英語教育とは

ベネッセ教育研究開発センター研究員
福本優美子

平成23年度からいよいよ小学5、6年生で週1時間、「外国語活動」が必修化される。それにより、平成25年度の中学新1年生は、70時間分の「外国語活動」を経て中学校に入学することとなり、さまざまな面での変化が想像される。すでに多くの小学校で取り組みが行われ始めている。本調査の結果から小中連携のあり方や課題について考えてみたい。

1 はじめに

小学校における英語教育（活動）は、すでにほとんどの小学校で取り込まれていると見ていいだろう。その実施率を文部科学省「平成21年度教育課程編成実施状況調査」の結果からみると、平成21年度は97.8%の学校で「5年及び6年で実施」計画があり、予定されている年間の平均時数も5、6年生ともに28.2時間である。本調査の対象者が受けてきた小学校における英語教育（活動）と、平成23年度から必修化される「外国語活動」とは異なる点に考慮しつつ、本稿では本調査結果をもとに、今後の小中連携について考えてみよう。

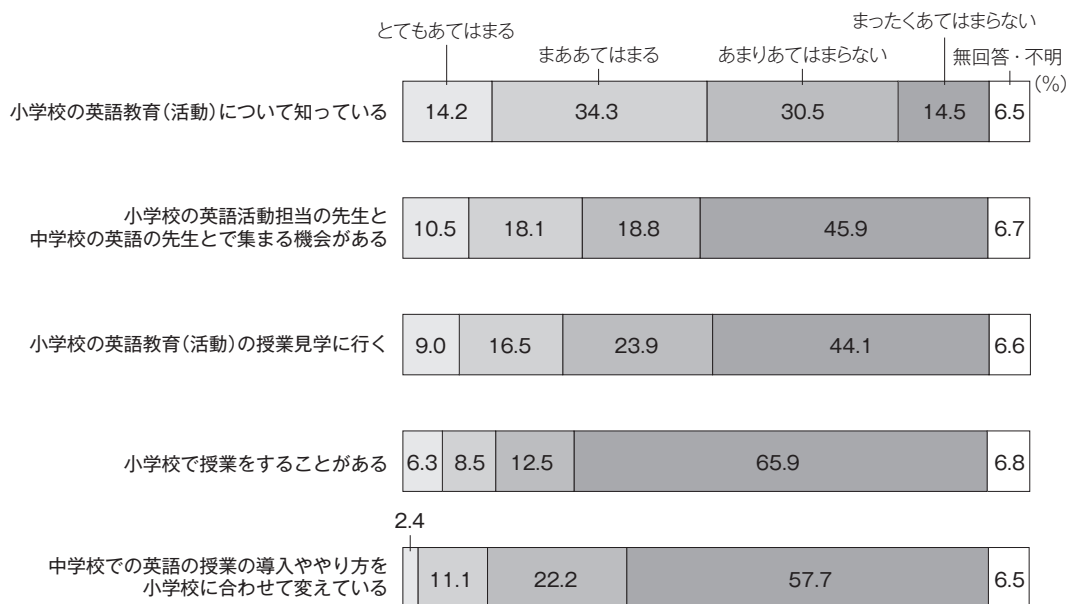
2 小学校英語（教育）に対する認知度はまだ低い

はじめに、「教員調査」の結果から、中学校の英語教員の小学校での英語教育（活動）に対する認識や小中連携の実情についてみてみよう。

図6-1は、校区内の小学校英語との関わりについてのデータを示している。まず、「小

学校の英語教育（活動）について知っている」に「あてはまる（とても+まあ、以下同）」と回答したのは48.5%と半数以下で、小学校英語に対する中学校の英語教員の認知度は半分に満たなかった。もちろん、回答者によってその「知っている」状況に違いはあると考えられるが、現段階では認知度は決して高いとはいえないだろう。以下、小学校英語との関わりについて段階的に想定し、その関わりの状況についてたずねた結果をみた。「小学校の英語活動担当の先生と中学校の英語の先生とで集まる機会がある」28.6%、「小学校の英語教育（活動）の授業見学に行く」25.5%、「小学校で授業をすることがある」14.8%と、ますますその比率は小さくなる。さらに、「中学校での英語の授業の導入ややり方を小学校に合わせて変えている」教員はわずか13.5%だった。「教員調査」を実施したのは「外国語活動」の本格実施以前の2008年度なので、具体的な小中連携はまだ、ほとんど始まったばかりの段階だといっていいだろう。今後、「外国語活動」が必修化されれば、これらの関わり度合いや連携に変化があると考えられる。

図6-1 校区の小学校英語との関わり



3 「英語を聞くことに慣れる」ことには期待

つづいて、中学校の英語教員が小学校における英語教育（活動）についてどのように考えているのかをたずねた結果をみてみよう（図6-2）。肯定する比率（「そう思う（とても+まあ）」、以下同）がもっとも高かったのは、「英語を聞くことに慣れる」79.3%で、約8割の中学校の英語教員が評価していた。次いで、「外国や異文化に対する興味が高まる」75.4%、「英語に対する抵抗感がなくなる」71.9%、「英語を聞く力が高まる」70.8%などがいずれも70%台と高い。これらの項目については、相対的にみて中学校の英語教員が小学校英語について期待している部分といえるだろう。一方で、「中学校入学時点での英語の学力差が出る」と思っている教員は65.0%と6割を超え、「中学校での英語学習がスムーズになる」は42.1%と、半数に満たない項目もあった。

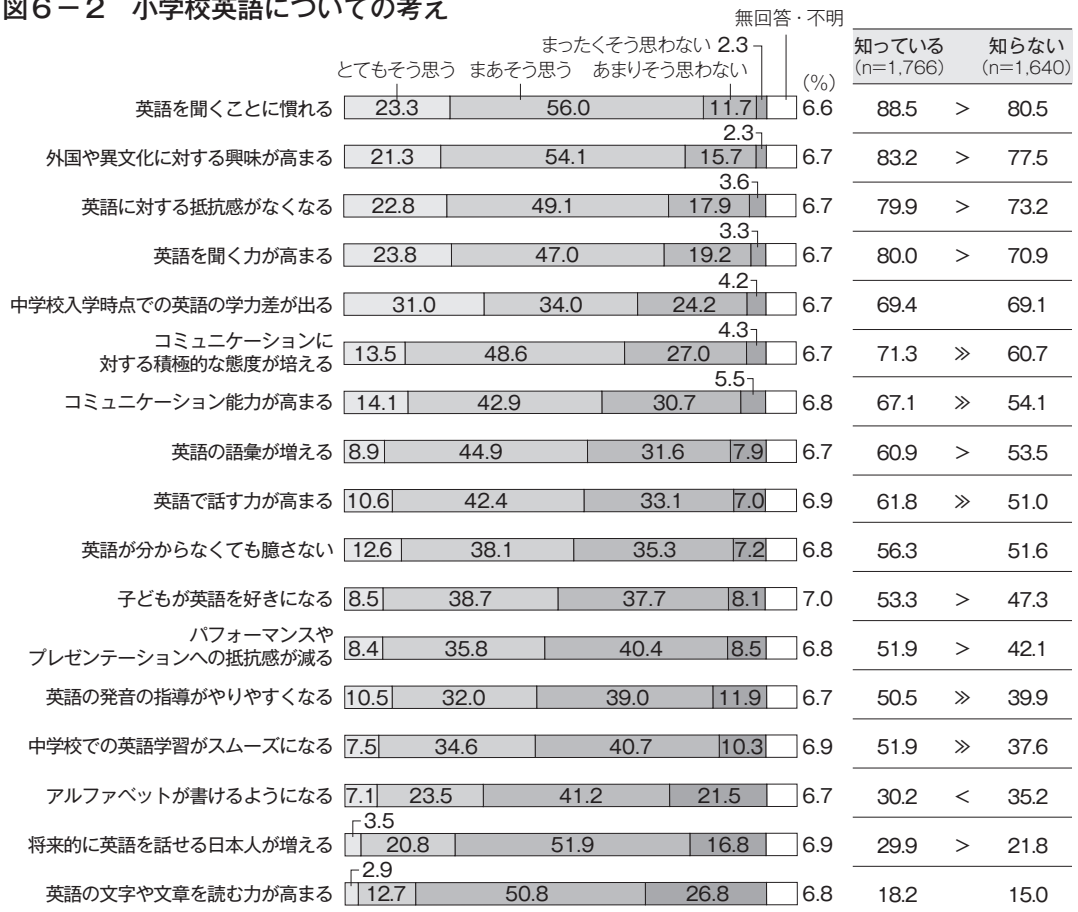
さらに、図6-1でみた小学校英語に対する認知度別にもみてみよう（図6-2）。校区内の小学校の英語教育（活動）について「知っている」と「知らない」という2つのグループにわけてみたところ、ほぼすべての項目で、

「知っている」教員のほうが肯定する比率が高かった。とくに差が大きかった項目は、「中学校での英語学習がスムーズになる」「コミュニケーション能力が高まる」「英語で話す力が高まる」「コミュニケーションに対する積極的な態度が培える」「英語の発音の指導がやりやすくなる」などで、いずれも「知っている」教員の方が10ポイント以上高かった。小学校英語について「知っている」教員だからこそ評価している部分だといえる。ただ、「中学校入学時点での英語の学力差が出る」についてはともに約7割と両者の差はほとんどなく、小学校英語に対する認知度にかかわらず、中学校の英語教員が不安に感じている点だといえることができる。これは、自由記述回答でもコメントが多かった点である。平成23年度から小学校で本格的に「外国語活動」が導入されることで、これらの数値がどのように変わっていくか、今後の変化をみたいポイントでもある。

4 「外国語活動」と「外国語科」の接続

小中連携は、小学校と中学校という異なる学校種での学びが、子どもたちにとってより効果的なものとなるためにも重要なことであ

図6-2 小学校英語についての考え



注1) 「小学校の英語教育（活動）について知っている」に対して、「あてはまる（とても+まあ）」という回答を「知っている」、「あてはまらない（あまり+まったく）」という回答を「知らない」としている。

注2) <>は10ポイント以上、< >は5ポイント以上差があるもの。

注3) サンプル数は3,643人。

ると考えられる。その小中連携では、体制のほかに、もちろんカリキュラムや指導内容などの具体的な接続も重要であろう。ここでは、「生徒調査」の結果をもとに、中学生の英語学習の現状と課題から、主に教育内容に関わる部分についての小中接続について検討する。

新しい学習指導要領では、小学校での「外国語活動」の目標を、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」としている。

一方で、中学校の「外国語科」では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標とされている。コミュニケーション能力の「素地を養う」から「基礎を養う」へと、学習指導要領上で示されているが、以上の目標を念頭に置いたうえで、「生徒調査」の結果から今後の小中接続について考えてみよう。

5 外国や英語に対する興味・関心を育てる

「生徒調査」の結果から、小学校での英語の授業や活動についての感想をみると、4割強の生徒が「外国や英語に興味をもった」と回

答している（「そう（とても+まあ）」、図表省略）。「興味をもった」生徒は、「中学校に入学する前、英語は好き」（「好き+どちらかといえば好き」）だったという回答も、また、「中学校で英語を学ぶことが楽しみ」だった（とても+まあ）という回答も高い（図6-3、4）。その他、「英語を使って外国の人と話してみたい」「外国の人と友だちになりたい」や、「世の中のいろいろな人の考えを知るの面白い」という回答も高く（図表省略）、外国や英語に対する興味の高まりとともに、「コミュニケーションへの積極的な態度」の育成につながっているとも考えられる。もちろん、小学校での英語教育（活動）だけが、その後の外国・異文化に対する興味につながるわけではないが、プラスに影響しているのは間違いないだろう。

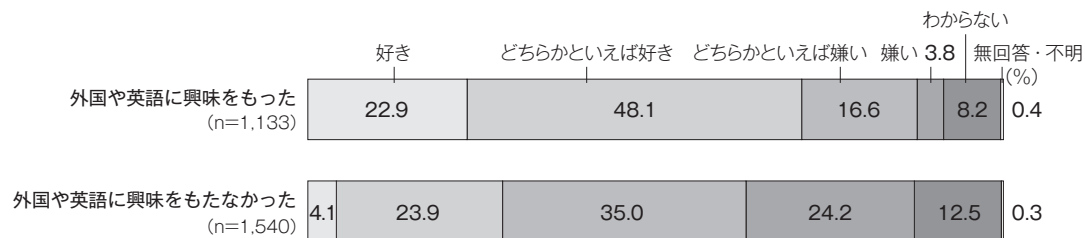
「教員調査」でも関連する項目がある。指導で重要だと思うことと実行していることについてたずねている。その結果をみると、重要だと思いつつも実行できていない項目があり、「外国や異文化に対する興味を高める」ことは

その一つでもあった（図表省略）。そういった面からみても、小学校の時点で外国や英語に対する関心を高めることは重要だと考えられる。先に図6-2でみたように、中学校の英語教員は小学校での英語教育（活動）に対して「外国や異文化に対する興味が高まる」と7割以上が肯定している。これは評価でもあり、期待でもあるといえる。詳しくは省略するが、「生徒調査」では英語を「好き」という気持ちが大切だということもさまざまなデータからみてとれる。小学校で芽生えた外国や英語に対する興味が、中学校やその後の学びに生かされていくことが重要であろう。

6 英語活動と4技能

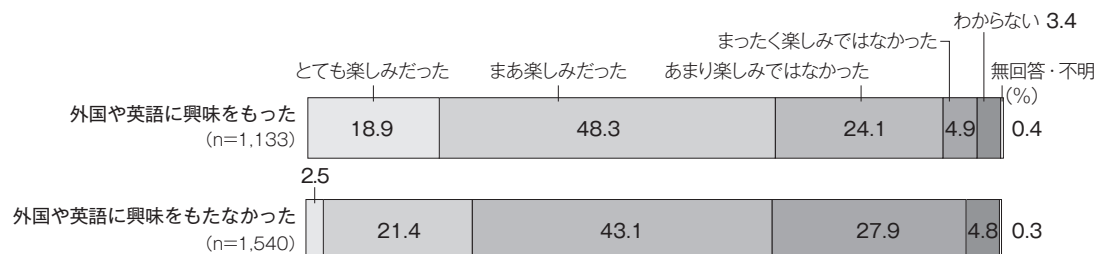
次に、具体的な内容についてもみてみよう。本調査では4技能の活動の好き嫌いをたずねている。いずれも「好き（とても+まあ、以下同）」という回答はそれほど高くなく半数に満たなかったが、それぞれ「英語を聞くこと」47.1%、「英語で話すこと」46.8%、「英語で書くこと」46.3%、「英語で文章や本を読むこと」

図6-3 中学校入学前の英語の好き嫌い



注) 小学校での英語の授業や活動についての質問で、「外国や英語に興味をもった」に対して、「そう（とても+まあ）」という回答を「外国や英語に興味をもった」、「そうでない（あまり+まったく）」という回答を「外国や英語に興味をもたなかった」としている。

図6-4 中学校入学前の中学校の英語に対する期待



注) 小学校での英語の授業や活動についての質問で、「外国や英語に興味をもった」に対して、「そう（とても+まあ）」という回答を「外国や英語に興味をもった」、「そうでない（あまり+まったく）」という回答を「外国や英語に興味をもたなかった」としている。

34.0%と「読むこと」がもっとも低かった（図表省略）。大きな差ではないが、生徒にとっては「聞くこと」「話すこと」は受け入れやすい活動のようだ。

新しい学習指導要領では、「外国語活動」の目標として、「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」とある。中学校の英語教員も小学校での英語教育（活動）の効果として「英語を聞くことに慣れる」ということをもっとも期待している（図6-2）。「外国語活動」が音声を中心として進められるのであれば、中学校英語ではその音声部分を入り口とした「聞くこと」「話すこと」から始めることによって、生徒がスムーズに中学校英語へと入っていけるのではないだろうか。

さらに、中学校入学前と中学校での英語の好き嫌いの変化と、4技能の好き嫌いの関連についてみてみよう。そこから、英語の好き嫌いに影響しているものについて検討する。

中学校入学前と中学校での英語の好き嫌いについて、4タイプにわけた（図6-5）。中学校入学前と中学校での好き嫌いに変化がない生徒は、①「中学校入学前：好き→中学校：好き」18.2%、④「中学校入学前：嫌い→中学校：嫌い」37.7%だった。一方、好き嫌いに変化があった生徒は、②「中学校入学前：嫌い→中学校：好き」5.2%、③「中学校入学前：好き→中学校：嫌い」26.7%だった。さらに、タイプ別に4技能の好き嫌いについてみると、英語の好き嫌いの変化にかかわらず、中学校で英語を好きな生徒は、4技能の「好き（とても+まあ）、以下同」という回答が全体的に高いのはもちろん、もっとも好きな活動は「書くこと」であった。「書くこと」は、英語という教科の「好き」と関連する重要な活動であることが推察される。

新しい学習指導要領では「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」の「指導の充実を図ること」で4技能のバランスのとれたコミュニケーション能力を養おうとしている。先の結果からも、「読むこと」「書く

こと」の指導は重要な部分だといえるだろう。今後、「外国語活動」で音声を中心に学んでくる生徒が、中学校で苦手意識を早い段階でもたないように、既習事項を生かしながら「読むこと」「書くこと」に入ることで、小・中学校の活動と教科のギャップを最小限に抑えることにつながるのではないだろうか。

7 まとめ

以上のように、小中連携について検討してきたが、何より、中学校の英語教員の小学校英語に対する認知度の低さが大きな課題だと考える。バラつきがあるとはいえ、すでに9割以上とほとんどの小学校で何らかの英語教育（活動）が行われている今、今後の小中連携・接続を考えるためにも、小学校での英語教育（活動）について意識を向ける必要がある。また、小学校での音声中心の活動を、中学校での学びにつなげるためにも、教員は「外国語活動」について把握する必要がある。もちろん、英語に限らず、多忙さや学校種別の違いなどがあり、小・中学校の教員が集まり、情報交換をしたり授業見学をしたりするには難しさもあるだろう。そのあたりに配慮するならば、教員の自主的な活動に任せるだけでなく、行政が仕組みや仕掛けとして、小中連携の体制づくりをすることが急務だと考える。相互の授業参観、小・中学校兼務の教員の配置、研修、連絡会の設定など、学校現場だけでは推進していけない枠組みづくりは、行政の支援があってこそ成り立つものだと考える。

「教員調査」では、「小学校における英語教育（活動）と中学校における英語教育との連携について、お感じになっていることをご自由にお書きください」という自由記述回答を求める質問がある。そこで目立った回答について最後にふれておこう。連携については、必要性を感じながらも忙しさや場がないなどの理由のため十分にできていない、といった意見の一方で、小中間の相互理解や学区ごとの計画立案の必要性など、連携に対して積極的な姿勢である意見も多くみられた。また、話す・

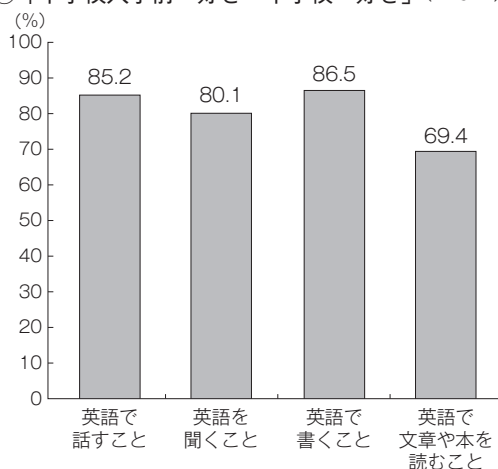
聞くが中心の小学校から中学校へとどのようにつなげるか、小学校での文字指導の必要性、あるいは、小学校では「書くこと」にこだわらず音声重視でよい、というような、文字や「書くこと」についての意見もあった。他には、小学校間での取り組みの違いなどによる中学校入学時点での格差や、小学校で苦手意識をもったり、英語嫌いになってしまうのではないかというような意見など多岐にわたり、期待と不安が入り

混じったものだった。

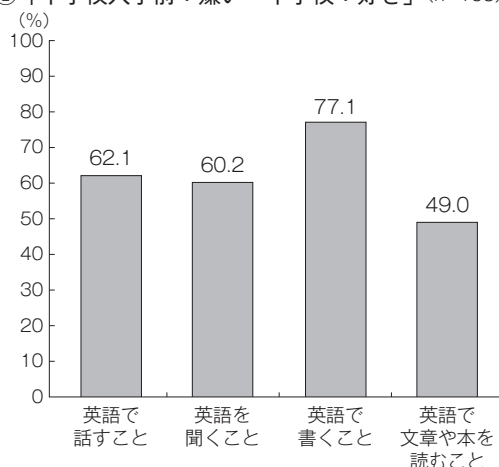
「生徒調査」では、中学2年生時点で英語に苦手意識をもっている生徒の多さも明らかになっている。一方で、将来の英語の必要性も感じている中学生にとって、小学校と中学校との効果的な接続は重要な課題であろう。小学校の「外国語活動」の必修化、中学校でも週3単位から週4単位への時間数の増加などの英語教育の充実を背景に、今後の英語教育に期待したい。

図6-5 英語の好き嫌い(中学校入学前/中学校)の変化の4タイプ別と4技能の好き嫌い

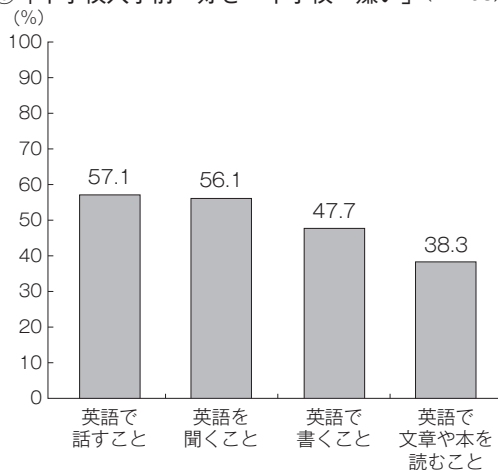
①「中学校入学前：好き→中学校：好き」(n=541)



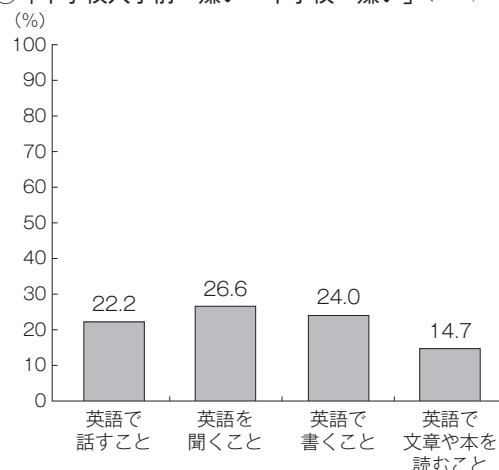
②「中学校入学前：嫌い→中学校：好き」(n=153)



③「中学校入学前：好き→中学校：嫌い」(n=793)



④「中学校入学前：嫌い→中学校：嫌い」(n=1,120)



注1)「とても好き」+「まあ好き」の%。

注2) 中学校入学前の英語の好き嫌い、中学校での英語の好き嫌いをもとに4タイプにわけた。「中学校に入学する前、英語は好きでしたか」という質問で「好き」「どちらかといえば好き」を選択した場合を「中学校入学前：好き」とし、「どちらかといえば嫌い」「嫌い」を選択した場合を「中学校入学前：嫌い」としている。また、「どの教科が好きですか」という質問で、「英語」を選択した場合を「中学校：好き」、選択しなかった場合を「中学校：嫌い」としている。「嫌い」と回答しているわけではないが、ここではわかりやすさを考慮して、「嫌い」と表記している。